平成 28 年 12 月 8 日

京都大学 工学研究科
航空宇宙工学専攻
教授　吉田　英生　様

ヤンマー株式会社
研究開発ユニット中央研究所
所長　川建　治

資料送付のご案内

いつも大変お世話になりありがとうございます。
下記の資料をお送りいたしますのでご査収いただきます様お願い申し上げます。
今後ともご厚誼の程よろしくお願い申し上げます。

記

■ヤンマー100 年史
■ヤンマー百周年記念出版『吾輩ハ複働四七ノ内火機械デアル』
※上記二点につきましては寄贈させていただきます。

■『エンジン一代 - 山岡孫吉伝』小島直記（著）
※弊社蔵書のため関係箇所を抜粋し送付させていただきます。

以上

YANMAR

小島直記

エンジン一代

山岡孫吉伝

ＹＤ中研図書室蔵書
0095000300

京都の竜安寺などの石庭にヒントを得、それに近代感覚をもりこんだ苦心の作で、幅二二メートル、長さ四四メートル、常緑樹の生垣で囲んだ中に、大小五六個の石と芝生を配し、優雅な中に明るさをたたえて、見る人を飽かせない。

「銅像よりこの石庭苑のほうがずっとよかった」

と孫吉はおもい、贈呈の日を待ち望むようになった。

翌三十二年二月、仮設石庭苑は解体し、五六個の石を一つ一つふとんに包み、三井船舶の箱根山丸に積まれて、神戸港発、パナマ経由でドイツへ送られた。それがアウグスブルク市のウィッテルバッハ公園についたのは五月一日で、それから復元造園されたのだが、早くからその詳細はドイツ国内に報じられていた。四月十五日ドイツの大十字功労勲章が孫吉に授与されたが、それに添えられたホイス大統領の親書には、石庭苑に対する感謝のことばとともに、石庭苑入口の牌石に刻まれたことばに感激したということが述べられていた。そのことばというのは、まず石庭苑の入口の牌石に、建設の由来とともに、「この石庭苑は、日本国民からドイツ国民への贈り物でもあります」というもので、孫吉がディーゼルを通じて抱いたドイツ国民への親愛の気持を述べたものだった。次に、中央の二〇数トンの巨石には、ディーゼルのプロフィルの下に、「ディーゼル博士、あなたはいまもなお日本のすみずみいたるところに生きておられます」と刻まれていた。大統領は、「これは貴方にして初めていえることばであって、前のことばとともに、日独友好にどれほど役立つかはかりしれない」と述べていた。なお最後の出口の自然石には、「偉人は自分一人のためでなく、多くの人々のために、この世に生をうけ

たのである」というディーゼルの座右の銘が刻まれていたのである。

贈呈式に参列するため、孫吉が糟糠の妻淑乃とともに羽田を発ったのはその年の九月であった。二男の淳男夫妻と大杉秘書が同行した。首都ボンでは、武内駐独大使につきそわれてホイス大統領を表敬訪問した。

テオドル・ホイスは孫吉よりも四歳年長で、ブラッケンハイム（ヴュルテンベルク）に生まれ、週刊紙『ヒルフェ』の編集に協力したのち、一九二四年（大正十三年）民主党から国会に選出、のち文筆生活に入って、『ヒトラーの道』などの著作がある。敗戦後、ヴュルテンベルク＝バーデン州会議員となり、同州文部大臣（四五～四六年）、西ドイツ自由民主党党首（四八年）、国会議員（四八～四九年）をへて、四九年（昭和二十四年）連邦共和国初代大統領に就任、五四年再選されて、いま孫吉と会ったわけである。著述家であるにもかかわらず、その手は農夫ののように大きく頑丈で、その手で孫吉の手を堅くにぎりながら、

「山岡さん、あなたは私がかねて想像していたとおりの人だったのでうれしい。あなたが西独国民へ贈ってくれたあの石庭苑は、今後三〇年、五〇年とたてばたつほど、苔むしてますます値打ちをまし、日独友好に永久に貢献するでしょう」

とよろこんでくれたのである。

孫吉一行は、日独友好の民間使節にされてしまったような大歓迎をうけた。どこのホテルに泊っても、山岡孫吉だとわかるとたいへんなもてなしぶりで、宿泊代もとろうとしないのだ。孫吉たちはかえって心苦しくなり、とうとう一週間ほど、オーストリアのウィーンへのがれて、

宮殿やオペラの見物などをして息抜きしたほどであった。

贈呈式は十月六日である。その三日前に孫吉一行はドイツにもどった。ミュンヘンのドイツ大博物館は、すでに前年五月決定していた「名誉理事」の就任式を行なった。孫吉はここには、銀の多宝塔と象牙製の宝船を、お礼としてすでに寄贈していた。

アウグスブルクは、ミュンヘンから自動車で約一時間余の行程である。孫吉は三日夕、アウグスブルクのミューラー市長と同乗して、美しく飾られたアウグスブルクの町に入った。そして四日、五日と二日間、オペラ招待、パーティなどの歓迎攻めにあった。マン社のノイマン社長は、同社の博物館に飾ってあったディーゼル博士の最初の二〇馬力エンジン二機のうちの一つを、

「あなたこそ、このエンジンを分け持つべき人だ」

といって孫吉に贈ってくれた。ディーゼル・エンジン・メーカーとして受ける最良の贈物といえるこのエンジンは、現在ヤンマー社の尼崎工場に展示されている。

十月六日はすばらしく晴れあがっていた。町全体がディーゼル記念石庭苑一色に塗りつぶされた感じであった。贈呈式は市公会堂で、武内大使夫妻はじめ、日独両国の外交官、地元の知名士など六〇〇人が参列して盛大に行なわれた。ミューラー市長の感謝の挨拶のあと、名誉市民のしるしである市の紋章入り黄金リングを授与された孫吉は、

「ディーゼル博士の崇高な志は、私たちおたがいの中に、いまもなお生きつづけております。私は、今日のこの企てが、日独友好のかけ橋となるよう念願するものです」

という趣旨の答辞を述べた。

式典後、午餐パーティとなったが、席上、オイゲン・ディーゼルは、

「まったくあなたのおかげで、亡き父は今日のよき日を迎えることができたのです」

と、感激に声をふるわせながら、亡父の最後の遺品、ネーム入りの金時計を孫吉に贈った。

そのあと、公会堂からウィッテルバッハ公園まで一五分間の徒歩大行進が行なわれた。沿道には、開苑を祝うために集まった市民五万人が並び、その大群衆は、ミューラー市長に先導されて先頭を歩む孫吉夫妻に万雷のような歓呼と拍手を送り、小学生たちは日の丸の旗を打ちふりながら、この異邦人に驚嘆と崇敬の目を向けていた。

糟糠の妻と共に歩む孫吉の姿は、映画『私は生きている』に収められている。美しい陽光の下、にこやかな笑みを浮かべながら、悠々と大股で歩く孫吉は、湖北の村を一人で出て、はからずも異郷で用意された〃栄光の花道〃を歩く人にふさわしく、意気揚々としている。しかし、それがいわゆる〃成功者〃の、これみよがしのいやらしさを感じさせないのは、この場面が現出するまでの心の世界が濁っていないからだ。孫吉は、こういう喝采と歓呼、世間的名声のために、金にあかせて寄付したのではなかった。ディーゼル・エンジン発明という人類社会への偉大な貢献をした人物に、銅像も墓もないとき、そこに同情と義憤を感じたのが寄贈の動機にほかならない。それは、「社長」とよばれながら「わしゃ社長やない」と否定する心の世界——最良の小型エンジンをつくって世の中のためになることだけを天職とし、名刺の肩書などよりも、製品の質の良さそのものを最高の誇りとし、生き甲斐とした市井の人、俗物根性（スノビズム）とは

装幀　米村隆

まったく別の、働く人間の真実だけに生きてきた男の、まさに「日本晴」の心情が、その画面に躍動していて、見るものを快い共感、感動に浸らせるのである。

ファンファーレがひときわ高くウィッテルバッハの森にこだまして開苑式がはじまる。夫を支え、夫にこの美挙を実現させた生涯の伴侶淑乃が、感無量の面持で静かにテープを切る。孫吉とミューラー市長は、中央巨石のディーゼル博士プロフィルの前で、しっかりと友情と感謝の握手を交わす。そこに奏でられる日本国歌「君が代」――孫吉の眼には涙があふれた。

孫吉よりも一二歳年上で、西ドイツの首相であったコンラッド・アデナウアーが日本を訪れたのは昭和三十五年（一九六〇）の早春だったが、彼は京都で孫吉と会い、歓談のひとときを過ごした。

菅浦農村家庭工業が発足したのはこの年の五月だが、七月には、孫吉は淑乃とともにブラジルへの旅をする。

孫吉が生産設備投資を最優先としていたため、いちばんあとにまわされたヤンマー本社ビルが完成し、披露式を行なうのがその翌年である。事業はますます隆昌の一途をたどっていたが、この間、孫吉の肉体は日一日と衰弱していた。そして、心不全症のため、男らしく戦いつづけた満七四歳の生涯を閉じたのは、創業五〇周年を直前にひかえた昭和三十七年（一九六二）三月八日午前九時一〇分であった。

（了）

著者略歴

小島直記（こじま なおき）

1919年福岡県に生まれる。1943年東京大学経済学部卒業。伝記作家。
著書：『人間の椅子』（鱒書房），『三井家の人びと』（光文社），『日本さらりーまん外史』（日本経済新聞社），『福沢山脈』（河出書房），『小説・三井物産』（講談社），『風貌姿勢』『ヨーロッパ旧婚旅行』（以上ダイヤモンド社），『極道』『ヨーロッパ碁苦楽旅行』（以上毎日新聞社），『小泉三申』『洋上の点』（以上中央公論社），『無冠の男』『異端の言説・石橋湛山』『大過渡期』『東京海上ロンドン支店』（以上新潮社），『一期の夢』（実業之日本社）など多数。

エンジン一代――山岡孫吉伝――

昭和55年 8 月21日　初版発行　　定価 1100円

著者　小島直記

© 1980　Naoki Kojima

発行所　ダイヤモンド社
郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集 電話 東京(504)6403
販売 電話 東京(504)6517
振替口座 東京 9-25976

編集担当／花田茂明
落丁・乱丁本はお取替えいたします

亨有堂印刷・高陽堂製本
0034-303610-4405

装幀　米村隆